

中隈山古墳群

福岡県久留米市国分町大字中隈山所在古墳群の調査

久留米市文化財調査報告書

第 8 集

1 9 7 4

久留米市教育委員会

中隈山古墳群

久留米市国分町大字中隈山所在古墳群の調査

序

貝塚・古墳・社寺・城跡等の遺跡は、それを圍繞する地形風土と深い関わり合いがあることが認められます。もともとこのような遺跡も、自然の開発の上に設けられたものともいえますが、そこには自然に対する大いなる畏敬といったものが見られ、現代の人間の傲慢さが自然を凌ぐといった開発の在り方とは根本から相違があると思われまます。

私どもは、現代に相応しい文化を創造しながら生活しています。その現代の華やかな文化も、祖先が長年にわたって築いた文化の上に築かれたものであり、文化財といわれるものが、わが国の長い歴史に培われた民族性、文化力の結晶であり、精神生活の所産であることを考えると、これをよりよく保存し、後世に伝えていくことは、現代に生きる私どもの義務であり、急速な発展のなかでの、大きな国民的課題であるといわねばなりません。

最近における急激な開発事業の進展は、遺跡や埋蔵文化財等の急激な消滅をもたらしていますが、所有者等との協議、調整がととのい現状保存できるのは極く稀で、殆んどが、やむを得ず緊急発掘調査を行い、記録を保存ということになり、その緊急調査さえ、関係者との協議など容易ではありません。また調査体制が整わないなかで、次つぎに発生する事例に、調査員は連日現場に追われ、出土品の整理も甚だしく停滞していて、報告書の発行も調査の早い順序にとはいかず、適宜整理の済んだものからという状態であります。

本報告書は、昭和48年7月、大洋土木造園株式会社の宅地造成中、ブルドーザーが古墳の石室に触れたことから、8月から12月にかけて延 150日間にわたって調査を行なったものです。

長期間工事を中止し御協力をいただいた会社に対し序文を借りて厚くお礼を申し上げます。

昭和49年3月31日

久留米市教育委員会

教育長 吉 武 不 二 男

例 言

1. 本書は、昭和48年8月から12月にわたり、大洋土木造園株式会社の宅地造成に関連して、緊急調査した埋蔵文化財の報告書である。

2. 発掘調査は、久留米市教育委員会が主体となり、文化担当の樋口一成、櫻井康治、池辺元明が担当した。

3. 本書の執筆分担は次のとおりである。

第1-1	樋 口 一 成
------	---------

2・3	池 辺 元 明
-----	---------

第2-1・2	櫻 井 康 治
--------	---------

3・4	池 辺 元 明
-----	---------

第3	櫻 井 康 治
----	---------

4. 掲載の図版は櫻井康治、池辺元明が撮影したものである。なお、実測図の作成は挿図目次に示すとおりである。

5. 本書の編集は、櫻井康治が担当した。

本文目次

第1 序 説

1. はじめに..... 1
2. 調査の経過..... 2
3. 中隈山古墳群の位置と環境..... 6

第2 古墳の構造と出土品

1. 1 号 墳..... 7
2. 2 号 墳..... 7
3. 3 号 墳..... 19
4. 4 号 墳..... 26

第3 お わ り に..... 33

図 版 目 次

本文参照頁

図版 1	(1) 中隈山古墳群遠景	7
	(2) 中隈山古墳群近景 (南から)	7
2	(1) 2号墳墳丘 (東南から)	7
	(2) 3号墳墳丘 (南から)	19
3	(1) 2号墳全景	7
	(2) 2号墳石室	8
4	(1) 2号墳墳丘断面	7
	(2) 2号墳遺物出土状態	7
5	(1) 3号墳全景	19
	(2) 3号墳石室	20
6	(1) 3号墳墳丘断面	19
	(2) 3号墳遺物出土状態 (前室)	20
7	(1) 4号墳全景	26
	(2) 4号墳石室	27
8	2号墳出土遺物①	10
9	2号墳出土遺物②	12
10	2号墳出土遺物③	14
11	2号墳出土遺物④	15
12	(1) 2号墳出土遺物⑤	17
	(2) 3号墳出土遺物①	23
13	3号墳出土遺物②	23
14	(1) 3号墳出土遺物③	26
	(2) 4号墳出土遺物	28

挿 図 目 次

第1図	4号墳墳丘(樋口一成撮影)	2
第2図	3号墳の発掘(櫻井康治撮影)	3
第3図	宅地造成された中隈山古墳群(櫻井撮影)	4
第4図	遺跡分布図(櫻井作成)	5
第5図	中隈山古墳群地形図(櫻井・池辺元明・三津井知広・豊田芳枝・ 近沢康治実測、櫻井製図)	折込み
第6図	2号墳墳丘土層図(櫻井・池辺実測、櫻井製図)	折込み
第7図	2号墳墳丘実測図(櫻井・池辺・近沢実測、櫻井製図)	8
第8図	2号墳閉塞部実測図(櫻井実測、製図)	9
第9図	2号墳石室実測図(櫻井・池辺・近沢実測、櫻井製図)	折込み
第10図	2号墳出土遺物①(櫻井実測、製図)	11
第11図	2号墳出土遺物②(櫻井実測、製図)	12
第12図	2号墳出土遺物③(櫻井実測、製図)	13
第13図	2号墳出土遺物④(櫻井実測、製図)	15
第14図	2号墳出土遺物⑤(櫻井実測、製図)	16
第15図	2号墳出土遺物⑥(櫻井実測、製図)	17
第16図	2号墳出土遺物⑦(櫻井実測、製図)	17
第17図	2号墳出土装身具(櫻井実測、製図)	18
第18図	3号墳墳丘土層図(櫻井・池辺実測、櫻井製図)	折込み
第19図	3号墳地山整形状態実測図(池辺・豊田・近沢実測、池辺製図)	20
第20図	3号墳閉塞部実測図(櫻井実測、池辺製図)	21
第21図	3号墳石室実測図(櫻井・池辺実測、池辺製図)	折込み
第22図	3号墳出土遺物①(中尾徹実測、池辺製図)	22
第23図	3号墳出土遺物②(中尾実測、池辺製図)	24
第24図	3号墳出土遺物③(中尾実測、池辺製図)	25
第25図	3号墳出土鉄器(池辺実測、製図)	26
第26図	3号墳出土装身具(池辺実測、製図)	26
第27図	4号墳地山整形状態実測図(櫻井・池辺・豊田・近沢実測、池辺製図)	27
第28図	4号墳石室実測図(櫻井・豊田実測、櫻井製図)	28
第29図	4号墳出土遺物①(中尾実測、製図)	29
第30図	4号墳出土遺物②(中尾実測、製図)	31

第31图	4号墳出土鉄器（池辺実測、製図）.....	32
第32图	4号墳出土装身具（池辺実測、製図）.....	32

表 目 次

表	遺跡分布図地名表.....	6
---	---------------	---

第1 序 説

1. は じ め に

本調査は、大洋土木造園株式会社（本社久留米市日吉町）の採土及び宅地造成工事に起因する緊急調査である。

昭和48年8月初旬より大洋土木造園KKによる造成工事が進められていたが、この事実を地元民から聞いた坂田健一氏（久留米市文化財専門委員、荒木中学校教諭）は、同8月10日久留米市教育委員会文化担当に通報された。同日午後文化担当職員古賀寿、樋口一成が現場に赴き遺跡の現況を調査し、後期古墳と思われる4～5基の古墳の所在を確認、散乱していた遺物を採集した。あわせて会社側に対し工事の中止を要請、造成地内の公園敷地等にふりかえるなど保存策をとるよう説得した。

福岡県教育委員会へこのことを知らせ、会社側と古墳の保存策、壊される古墳の調査費の負担、期間等について話し合いを続けていたが、8月19日会社側は突然遺跡地内の工事を再開し、残存状態の良い4号墳を全壊させ、3号墳、2号墳を損壊させた。直ちに市教委は嚴重に抗議し文化財保護法第57条の2の規定による届出をするよう強く説得した。

8月25日本古墳群の保存について、最終的に企業利益を追求する会社側との調整がつかず、県・市および会社の調査費一部負担のもと、8月27日より緊急調査を実施することになったものである。

幕末の久留米藩学者矢野一貞翁によって紹介された石櫃山古墳を盟主とする中隈山古墳群は昭和29年秋久留米市建設部が施工した、中隈山市営住宅建設時に発見され広く市民に周知されていた遺跡である。当時九州大学教授鏡山猛氏によって調査が行なわれ、この地方における後期一終末期古墳の築造、隣接する浦山古墳群との関わりなど問題点が指摘されていた。

なお石櫃山古墳は、昭和43年12月県教委において調査されている。

調査員の構成は下記のとおりである。

調査責任者	久留米市教育委員会 教育長	吉 武 不二男
	文化担当主幹	半 田 豊
	文化財係長	塚 本 直 次
		樋 口 一 成
調査担当者		櫻 井 康 治
		池 辺 元 明

2. 調 査 の 経 過

発掘調査は、1973（昭和48）年8月27日から12月19日まで行なった。

なお調査の遂行にあたっては、地元在住各位と近沢康治氏（福岡大学）、豊田芳枝氏および南筑高校歴史部諸君の理解と協力を受けた。また遺物整理において中尾徹氏および久留米信愛女学院高校考古学部安徳和子、斉藤美穂子、山中久美子の諸君の多大なる協力を得た。記して感謝の意を表わしたい。

8月27日 現場に発掘器材を搬入する。調査は、業者の作業計画と調査の進行について前日調整のとおり、土砂搬出を急ぐ調査区南側の4号墳から発掘することにした。

8月28日 4号墳はブルドーザにより完全に破壊されており、石室の破壊状況からみると、基部の石組みの残存の可能性もあるようだ。破壊土砂の除去作業を行う。

9月4日 2号墳・3号墳の伏採及び清掃作業を開始する。

9月6日 4号墳は砂壤土砂除去を終る。絶対標高を上津郵便局前から移動し、遺跡地内に仮B・Mを設定する。

9月7日 遺跡の南側から地形測量を縮尺100分の1で始める。

9月11日 土砂の除去作業終了。南側斜面の地形測量完了。

9月12日 写真撮影のため、遺跡全体にわたり清掃を行う。

9月14日 明星中学校から遺跡の遠影、遺跡南側より近影の撮影を行う。

9月17日 東側斜面の4号墳を中心とした地区から地形測量を開始する。

9月20日 4号墳の墳丘は完全に破壊を受けているため、周溝及び地山整形状態の確認に主力をおいて調査開始。

9月27日 4号墳周溝を確認発掘開始。

9月28日 4号墳付近の地形測量を終了し、3号墳を中心とした地区への地形測量を進める。

10月1日 3号墳付近の地形測量を終え、2号墳の地形測量へ移る。4号墳周溝の調査続行。

10月3日 地形測量を全て完了する。

10月4日 4号墳周溝の調査に並行して石室の調査を始める。

10月9日 4号墳玄室の床面はかなり攪乱を受けていたが、金環、勾玉、丸玉鉄鏃が出土した。

10月11日 4号墳の周溝はほぼ全体の調査が終わり、馬蹄形を呈することを確認した。



第1図 4号墳墳丘

周溝南側末端部、黒色土層より多量の須恵器片が出土。地山整形の状態も一部破損を受けているが、かなり明確となる。

- 10月16日 本日より3号墳調査開始、4分法により墳丘盛土をすべて除去する調査法をとる。
10月17日 3号墳の墳丘調査続行、石室及び羨道は盗掘による破壊が著しい。
10月19日 3号墳墳丘調査続行。墳丘裾部に於いて須恵器、土師器が出土する。
10月24日 4号墳石室掘方の確認。3号墳墳丘除去作業続行。
10月25日 4号墳は石室掘方を掘り上げ、発掘完了。
10月30日 4号墳周溝、石室の写真撮影を行なう。
11月1日 4号墳石室平面図作成開始。
11月2日 4号墳石室実測続行。3号墳は墳丘の調査とともに石室、羨道部の発掘開始。
11月5日 4号墳石室断面図作成(1/20)。3号墳石室プランは、胴張りを呈する玄室と前室を持つ複室の横穴式古墳であることが判明する。
11月6日 3号墳前室床面から鉄鏃、須恵器出土。
11月7日 4号墳石室実測完了。3号墳は墳丘除去作業をほぼ完了し、周溝の発掘を始める。
11月9日 3号墳周溝、地山整形状態が明確になる。
11月10日 4号墳地山形測量開始(1/50)。午後1時半より、現地説明会を行う。
11月12日 4号墳地山形測量完了。2号墳に、東(C)、西(A)、南(B)、北(D)、に幅1.5mのトレンチを設定し、調査を開始する。

- 11月13日 A・B・Dトレンチ発掘。
11月16日 A・B・Dトレンチ発掘続行。Cトレンチ発掘開始。
11月17日 A・B・Dトレンチの墳丘裾部で、周溝を確認する。なお周溝の肩部から葦石と思われる多くの石を発見した。



第2図 3号墳の発掘

- 11月18日 3号墳墳丘断面図作成(1/20)。
11月19日 A・B・Dトレンチ調査で石室の奥壁及び側壁が部分的に残存していることが判明。Cトレンチで羨道部の石組を確認する。3号墳墳丘の畦の除去作業開始。
11月20日 3号墳の畦の除去作業続行するとともに写真撮影のための清掃を始める。
11月21日 2号墳は周溝の位置をさらに明確にするため、A・B間にF、B・C間にG、C・D間にG、D・A間にEの幅1mで各トレンチを設定。3号墳の清掃続行。
11月22日 3号墳の周溝、石室の写真撮影を行なう。

11月23日 E・F・G・Hの各トレンチ調査続行。3号墳地山地形測量開始(1/50)。

11月24日 3号墳地山地形測量終了し閉塞部の実測図作成開始(1/20)。E・Fのトレンチでは周溝を確認したが、G・Hのトレンチでは確認できない。2・3号墳と同様に、馬蹄形を呈するものと思われる。



第3図 宅地造成された中隈山古墳群

11月25日 3号墳閉塞部実測完了。2号墳は墳丘断面図作成開始(1/20)。

11月26日 3号墳は閉塞部除去後、写真撮影を行なう。墳丘断面実測続行。なお、築成時の墳丘状態を明確にするためにA・Bトレンチ間の表土はぎ開始。

11月27日 2号墳墳丘断面実測終了。A・Dトレンチ間の表土はぎ開始。A・Bトレンチ間で葦石を確認する。

11月28日 3号墳石室実測図作成開始(1/20)。2号墳は、A・Dトレンチ間においても葦石を確認。B・C間、C・Dトレンチ間の表土はぎ開始。

11月29日 3号墳石室実測続行。Cトレンチの西側墳丘裾部で祭祀に使用されたと思われる須恵器、土師器が多数出土。

11月30日 3号墳石室実測終了。2号墳は表土はぎをほぼ終了し、築成時の墳丘状態が明確になる。なおB・Cトレンチ間でも若干の葦石を確認する。

12月3日 2号墳は墳丘地形実測図作成(1/50)を開始するとともに、石室の調査を始める。

12月5日 2号墳墳丘地形実測続行。墳丘断面は写真撮影を行なう。また玄室から丸玉、勾玉、管玉、金環、銀環、土師器等の遺物が出土した。

12月6日 2号墳墳丘地形実測が終了し、Aトレンチの墳丘断面図作成(1/20)を行なう。墓道より金環が出土する。

12月7日 Bトレンチ墳丘断面図作成(1/20)。石室の発掘完了。

12月8日 Cトレンチ墳丘断面図作成(1/20)。写真撮影のため、清掃を行なう。

12月9日 2号墳の写真撮影を行なう。

12月10日 本日をもって、発掘器材を徴収する。

12月11日 石室及び、葦石の実測図作成開始(1/20)。

12月15日 葦石実測終了。

12月19日 石室実測を完了し、延115日間の発掘作業をすべて終える。



第4圖 遺跡分布図

3. 中隈山古墳群の位置と環境

中隈山古墳群は、福岡県久留米市国分町大字中隈山にあり、筑後川の南、明星山から西流する一支、標高42mの瓢型の丘陵上に位置している。当古墳群は北方に広がる平野、南西の有明海に広がる筑後・佐賀平野、また東方の吉井、浮羽町にのびる平野のいわゆる要といえる地勢の中に所在する。

当古墳群の周辺には、古墳時代の遺跡をはじめ、縄文、弥生時代の散布地、国府、上代の神社、寺院跡等の広い分布が見られる。

たとえば、東方約0.5kmの同丘陵上には、横口式家形石棺の主体部をもつ石櫃山古墳、西方約6kmには、御塚・権現塚古墳、南方約6kmには九州型古墳文化の代表的存在である岩戸山古墳・乗場古墳、南約5.5kmには石人山古墳等の前方後円墳、北西約5kmには石障系の装飾古墳として著名な日輪寺古墳、西約0.3kmには、横穴式家形石棺をもつ浦山古墳、またそれを中心として10数基の古墳群、南西0.4kmには、上津古墳群、北西約1.5kmには、久留米ピラミッドとして親しまれる祇園山古墳、それを中心とする古墳群などがある。

また、北西約2.3kmの高良山には、高良大社、高良山神籠石、北方約3kmには、筑後国府跡、約1.5kmには筑後国分僧寺・国分尼寺跡があり、平安・鎌倉期の寺院跡も数多い。

このように筑後地方は、筑後川の悠久たる流れによって、肥沃広大な平野を形成するとともに、すばらしい古代文化が育まれた。

(1) 中隈山古墳群	(6) 国分尼寺跡	(11) ギャクジ遺跡	(16) 隈古墳
(2) 浦山古墳群	(7) 葉山遺跡	(12) 立石遺跡	(17) 大銃場古墳
(3) 石櫃山古墳	(8) 阿弥陀遺跡	(13) 福聚寺古墳	
(4) 打越古墳	(9) 久保野遺跡	(14) 池ノ谷古墳	
(5) 国分寺跡	(10) 池田窯跡	(15) 隈山古墳	

表 遺跡分布図地名表

第2 古墳の構造と出土品

1. 1号墳

(1) 構造

1号墳は、丘陵の頂上部に立地しており、しかし丘陵頂上部の西側半分は、先年の宅地造成によってすでに削平されていた。1号墳もその時に大半を削られてしまい、崖面には石室の掘方の1部分と思われる落込みがみられた。また附近には、石室に使用されたとと思われる石材が散在していた。前回の造成によって難をまぬがれた若干の墳丘も、今回の宅地造成により、調査に先立ってブルドーザーによって破壊されていた。これらの結果、残念ながら古墳の構造や規模を確認することが不可能であった。(第5図)

2. 2号墳

(1) 構造

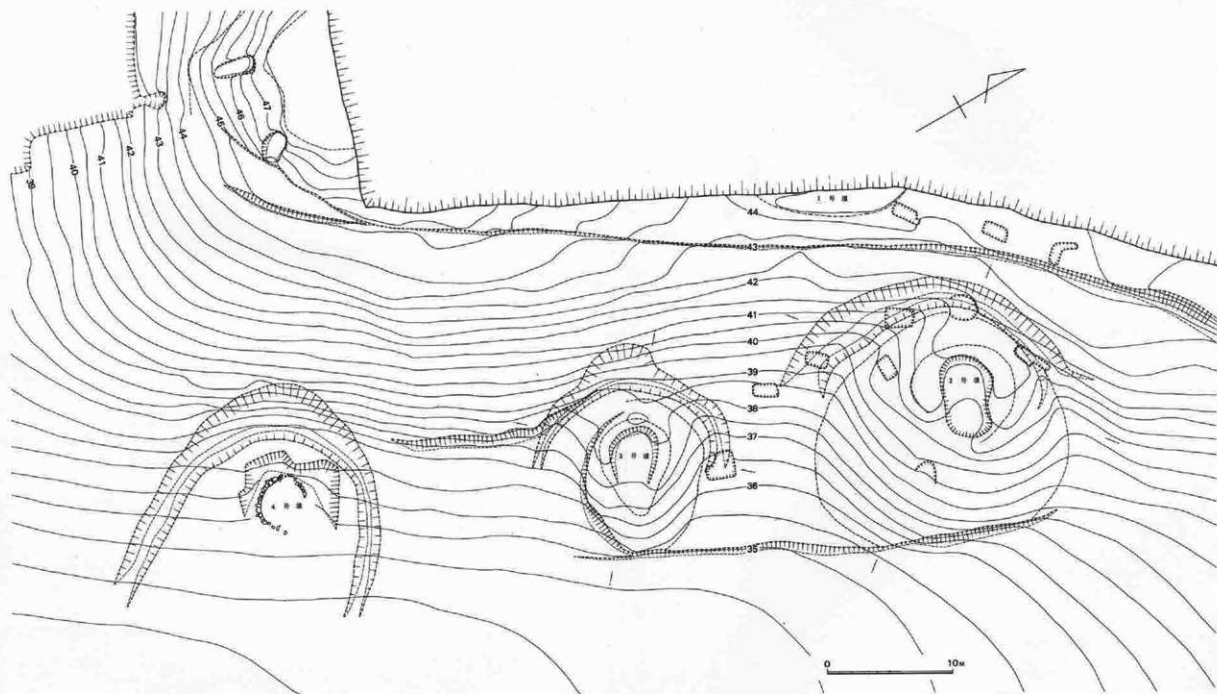
墳丘(図版2-1・3-1・4-1、第6・7図)

2号墳は中隈山古墳群のなかでもっとも大きな古墳であり、また1号墳が丘陵の頂上部に立地するのに対して斜面に立地している。墳丘は、石室が崩壊して中央部が大きく窪んでおり、また各所に戦時中の防空壕や方形の穴が掘られ、かなりの攪乱を受けていた。

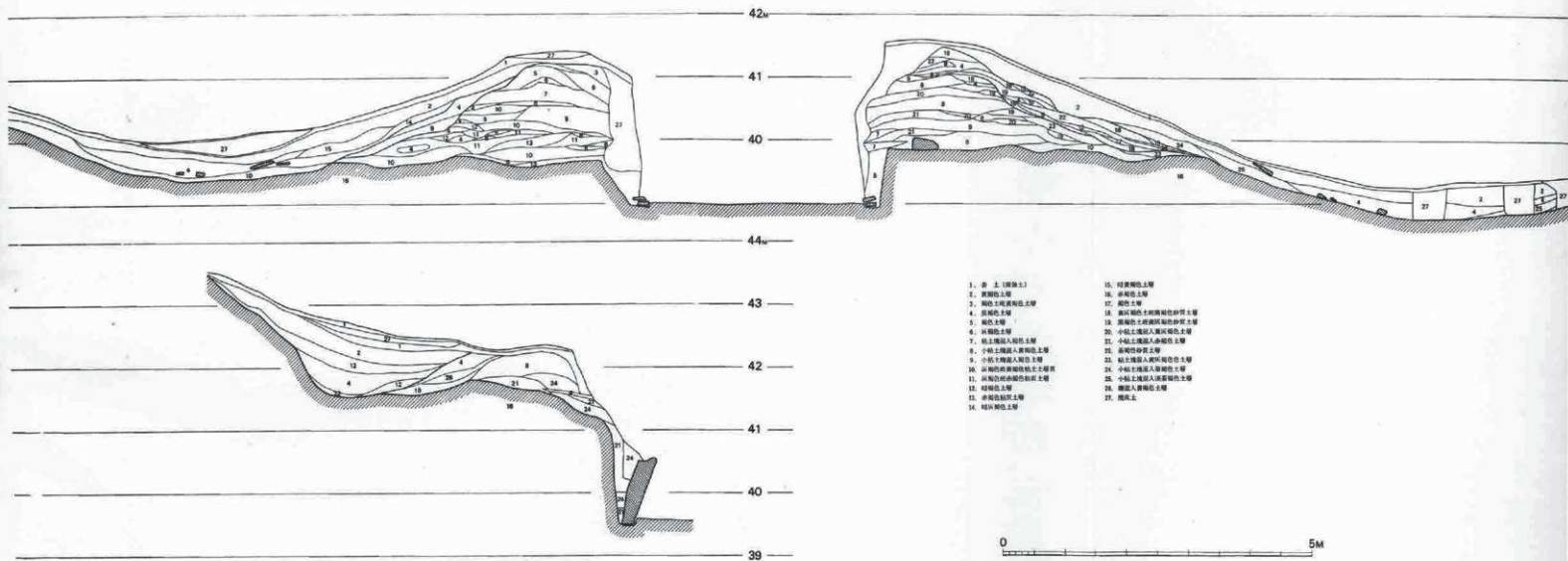
古墳の築造は、地山の整形から行なわれており、墓壇並びに周溝が掘られている。

墓壇は標高39m、比高約4mの斜面の中腹に掘られ、幅約4mを測る。周溝は墳丘を完全にめぐるのでなく、墳丘の西側半分つまり斜面上方だけに施設されている。溝の幅は斜面上方部が一番狭く約2m、深さ1m、裾部に向うに従って広くなり最大幅約4m、深さ0.5mを測る馬蹄形の周溝である。しかし斜面の中腹に掘られた墓壇は、周溝との関係から地山に照り込んだ部分だけでは石室の全長の半分程の長さに限られるために、墓壇の前面(東側)を地上げし平坦面をつくることによって不足分が補われさらに南側にも平坦面が付設されている。地上げされた部分は平面扇状を呈しており、この段階において周溝を含めて直径約20m円形の基段が構築された。

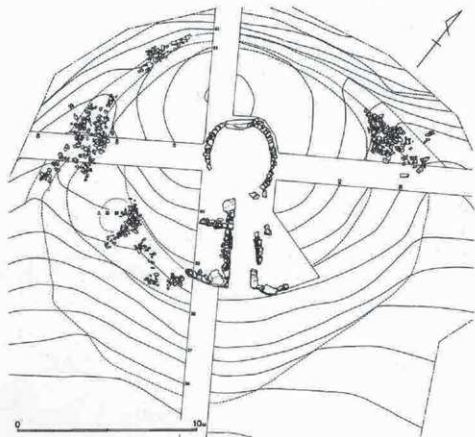
盛土は墓壇の床面より約1mの高さまで石室の架構と並行して盛土を行なっている。次の段階において石室の架構に主力がおかれ、石室を支えるのに最小限の盛土を行ないながら天井部まで完成させている。最後に墳形全体を整えるための盛土を行なっている。盛土は、20数種の土層に分かれ、高さは約1.8m、直径約14mを呈する。墳丘中央部の窪みを補足して、本来の



第5圖 中源山古墳群地形図 (1/300)



第6圖 2号墳填丘土層圖 (1/60)



第7図 2号墳墳丘実測図 (1/500)

高さを想定すると墓壇の床面から約3mを測るものと思われる。

墳丘の各所に石材が集中しているのが見られる。墳丘の北面にみられるものは、周溝の底部から墳丘斜面に貼り付けた状態で検出された。墳丘の西面にみられるものは、周溝の底部に貼り付けられているが、南側の石群については雑然としている。さらに墳丘南面にみられるものは、基段部の平坦面に位置しており、石群の西側からは、杯・高杯・壺・甕・横瓶等の須恵器や土師器が発見された。この結果において、墳丘の北、西面の石群から判断して墳丘の外部施設である葺石が葺かれていたかどうかは決定しがたい。また南面の石群や土器群については、この平坦部において祭祀が行なわれたと考えられる。

石室 (図版3-2・第8・9図)

石室はすでに大部分が崩壊しており、詳細を知ることは不可能である。石室全長約9.3mを測り、主軸はS-35.5°-Eを呈し、東に開口した単室の横穴式石室である。玄室は、奥壁の部分と北壁基部および南壁の一部を残すのみであった。奥壁には幅約1.6m、高さ約1mの1枚

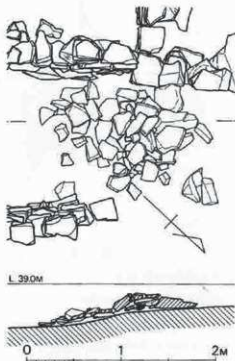
石を据えており、両壁は板石をもって順次持ち送りながら木口積を行なっている。玄室の最大幅はほぼ中央部にあり約 3.4m 長さは約 4.0m の楕円形を呈している。床面も擾乱が激しく詳細は不明であるが、部分的に数石と思われるものが残っていた。

玄室の東側に羨道が付設されている。羨道部は長さは約 1.7m を測るが、幅は不幸にして北壁が完全に崩壊しているために推測にとどまるが玄室側で約 0.8m、墓道側で約 1.0m と考えられる。南壁の石積を観察すると、三段ほど残存しており、ほぼ垂直に木口積されている。玄室と羨道部の構築上の関連は現状においては不明であるが、接合部の基礎に縦 0.8m × 横 0.6m × 高さ 0.2～0.3m の大きさの石材を置いている。羨道部の石積は、南側にほぼ直角に曲っており、面を東側に揃えられ約 1.8m を測る。

墓道は長さ約 3.2m、幅約 1.3～1.5m を測る。墓道にも石積が行なわれており、最高六段の石積が残存していた。石の積上げ方法は、玄室の持送り式や羨道部の垂直な積み方とは異なっており、長軸約 0.3～0.4m の板石を階段状に木口積している。しかしこの積み方は、墓道の全体を占めるのではなく、先端の約 1.5m は垂直に積みれ、幅も約 1.2m と狭くなっており、羨道部、墓道に使用されて小形の石にくらべて大形の石材を使用している。羨道部と墓道の接合部の関係は、羨道部が途中で直角に曲って構築されているために、墓道の構築は羨道部の屈曲部から新たに構築されている。さらに先端部との関係は、階段状の積上げを中央部あたりから、少しずつ垂直にさかづける構法が行なわれている。墓道の先端部は、両壁ともさらに直角に曲がり、弧を描きながら約 2.4m の列をなしている。

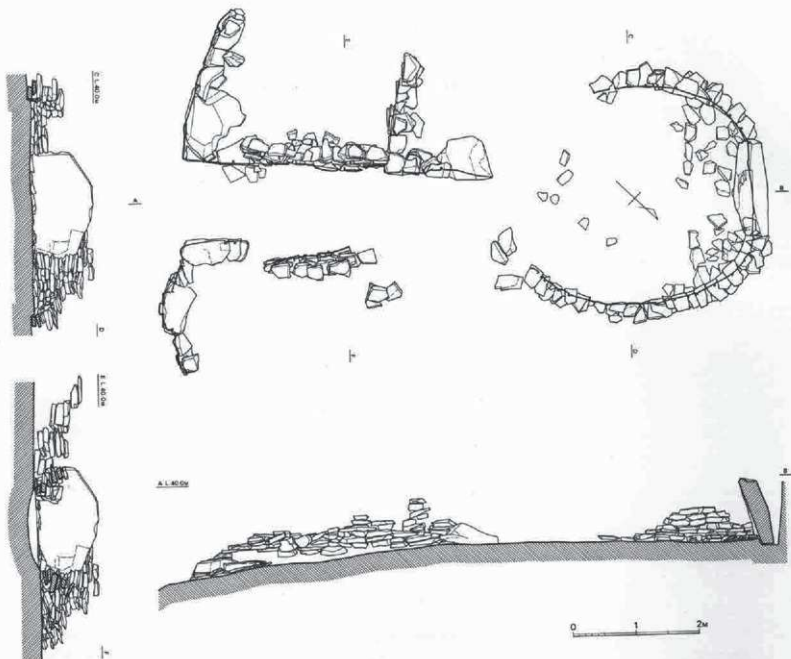
羨道部や墓道においては、数石は確認されなかった。

羨道部の前半分において、小形の石が密集して積みかさなっているのが発見された。また、この部分を境にして墓道側に黒色土の埋土がみられることから、この部分が石室の閉塞部と考えられる。



第 8 図 2 号墳閉塞部実測図 (1/60)

(2) 出土遺物



第9図 2号墳石室実測図 (1/60)

須 恵 器

出土遺物のなかで多量に出土したのが須恵器である。

これらの須恵器は、前述の石室南側の平坦部から発見されたものである。また墳丘南側の裾部や斜面の上層からも多数発見された。この裾部や斜面で発見された須恵器と接合が可能であったことから、流れ出したものと考えられる。

杯 蓋

I類(図版8-1~3、第10図1~6) 口径11cm~12.5cm、高さ3.5cm~4.0cmを測る。天井部は若干の丸味をもち、口縁部は外側に開き気味である。1~4は天井部と口縁部をわける段を有し、1は2つの段を有している。5~6は段を有していない。口縁端の内側には段があり、5は段の部分でさらに外側に開いている。

II類(図版8-4・5、第10図7~13) 口径11cm~12.8cm、高さ3cm~4cmを測る。天井部は若干の丸味を有し、口縁部はほぼ垂直にたちあがっている。外側は口縁部のたちあがる部分まで逃げずりの痕跡が強く残っている。口縁部は横なでされ、口縁端は丸く整えられている。11は、口縁端に稜を有し外側に開いている。7~11については器肉は厚いが、12~13は若干薄い。

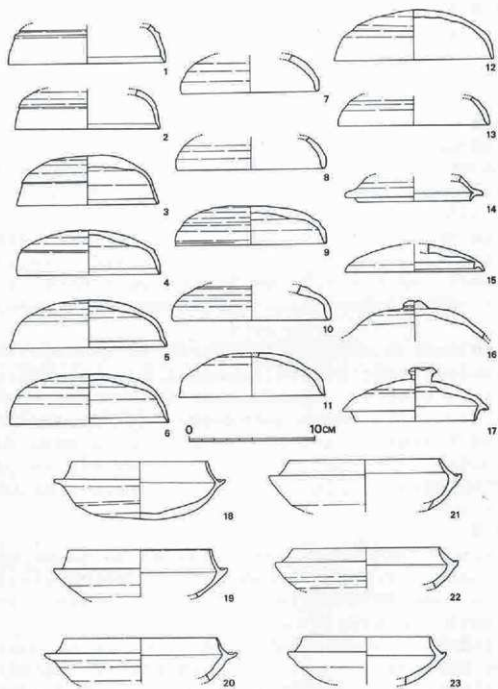
III類(第10図14~17) 14は口径8.9cm、高さは欠損して不明である。肩はゆるやかに下がり先端は身受部となり反転して反りを有する。15は口径11cm、高さ約2.9cmを測る。天井部から口縁部へ丸く整えられており、口縁部の内側に口縁端より上方に反りがつけられている。天井部に握みがついていたかは不明である。16は口縁部が欠損して口径および高さは不明である。天井部に若干平坦面を有し、頂部には中凹みの握みが付設されている。17は口径11.5cm、高さ4.2cmを測る。天井部から口縁部にかけて丸く整えられており、口縁端は身受部となる。口縁端の内壁には反りを有し、ほぼ垂直に立ち上がっている。頂部には中凹で首の長い握みを付設している。

杯 身

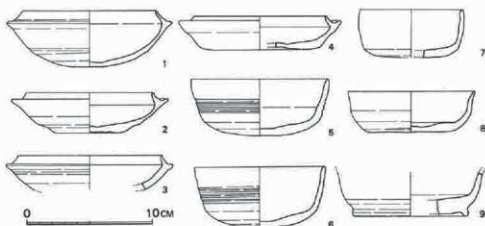
Ia類(図版8-16、第10図18~21) 口径15.3cm~13.9cm、高さ4.5cm~5cmを測る。底部から口縁部にかけて丸く整えられており、口縁端は蓋受部となる。口縁端の内壁には反りを有し、18~20は薄手の反りが立ち上がるようにしてついている。21は反りが内傾している。反りの先端は18・19・21は丸く整えられているが、20は尖っている。

Ib類(図版8-7、第10図22~23・第11図1) 口径12.5cm~14.6cm、高さ4cm~4.5cmを測る。底部から口縁部にかけて丸く整えられており、口縁端は蓋受部となる。口縁端の内壁には反りを有している。反りはかなり内傾しており、22・23については厚手を呈すが、1は若干薄手である。

Ic類(図版8-9、第11図2~4) 口径12.5cm~13.3cm、高さ2.7cm~3.2cmを測る。2



第10圖 2号墳出土遺物①(Ⅱ)



第 11 図 2 号墳出土遺物 ② (1/5)

は底部直径 5 cm、4 は 8 cm の平坦面を有している。3 は欠損しているために不明である。口縁端は蓋受部となり、2 は蓋と接する部分に段を有する。反りは短くなり、ほぼ垂直に立ち上り尖端は丸く整えられている。

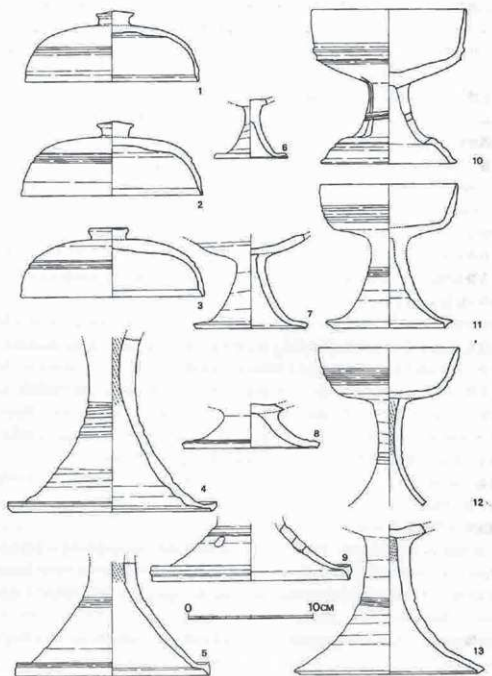
Ⅱ類 (図版 8-10、第11図 5-8) 5-6 は口径 10.4 cm ~ 10.9 cm、高さ 4.5 cm ~ 4.8 cm を測る。底部は丸味を有し、口縁部はほぼ垂直に立ち上がり、底部と口縁部をわける部分に稜線を有するが、はっきりしたものではない。口縁部には 3 本の寛描き沈線を有し、口縁端は丸く整えられている。7 は口径 8.1 cm、高さ 3.9 cm を測る。底部は平坦面を有し、口縁部は垂直に立ち上がり、口縁部と底部をわける稜線を有する。口縁端は丸く整えられている。8 は口径 10 cm 高さ 3.3 cm を測る。底部は直径 6.5 cm の平坦面を有し、口縁部は底部から丸味を持って垂直まで立ち上がり、口縁端は外側に広がっており、尖端は丸く整えられている。

Ⅲ類 (第11図 9) 高台付の杯身であり、口径、高さは不明である。器肉は底部において極端に厚い。

無蓋高杯

Ⅰ類 (図版 9-4、第12図 10) 口径 12.1 cm、高さ 12.3 cm を測る。杯部は底部から口縁部はほぼ垂直に立ち上がっている。底部と口縁部をわける部分に二条の稜線を有する。上的一条は丸味を持つが、下的一条は鋭く尖っている。口縁端は丸く整えられており、底部は匱けずりの後に櫛による調整の部分がある。脚部はしだいに広がり、裾においてふくらみを持って内傾する。裾部の肩に 2 条、円筒部に 3 条の沈線を有し、円筒部の沈線の下に長方形の透しが 3 方みられる。

Ⅱ類 (図版 9-6、10-1、第12図 11-13) 11 は口径 10.8 cm、高さ 11.5 cm を測る。杯部は、底部が平坦面を有し匱けずりの後に櫛による調整が行なわれている。口縁部は若干外側に開き、体部に 3 条の沈線がある。脚部はなだらかにラッパ状に広がる。器肉は杯部の接合部付近が厚



第12圖 2号墳出土遺物③ (3/4)

く、裾部が薄くなっており、裾部先端は断面嘴状を呈する。また脚部には二条の沈線を有している。12は口径11.1cm、残存高12.1cmを測る。杯部は、11に比較して丸味を有している。脚部は細く裾部でゆるやかに広がる。器肉は全体的に薄く、裾部先端は11と同様に断面嘴状になると考えられる。

Ⅲ類(図版9-3、第12図6) 裾部 5.9cm、残存高 4.7cmを測る。杯部は欠損している。脚部はラッパ状に広がり、裾部付近でさらに外側に広がる。裾部先端は尖り下へ曲げられている。

有蓋高杯

蓋(図版9-1~2、第12図1~3) 高杯の蓋であり、口径13.7cm~14.5cm、高さ 5.1cm~5.9cmを測る。天井部は丸味をもっているが、やや平坦な感じを残し口縁部はやや開き気味で、口縁端は丸く整えられている。天井部と口縁部のわかれる部分に2条の沈線がみられる。口縁端の内面には稜線を有する。頂部に1~2は径3cmの擬宝珠形、3は中凹みの撮みが付設されている。

Ⅰ類(図版9-7、第12図4~5・9) 4は裾部径16.6cm、残存高13.7cmを測る。なだらかに裾が広がり、裾先端は上下に張り出しており、下部の断面嘴状のものは内傾する。4条の沈線を有するが、1条は途中で消滅する。5・9は裾部径15.4cm~16cm、残存高 4.5cm~9.5cmを測る。5は2条、9は3条の沈線を有する。裾先端は上下に張り出し、垂直に立ちあがっている。9は沈線の下に3方の円形透しがみられる。

Ⅱ類(図版9-5、第12図7~8) 7は裾部径 9.1cm、残存高 7.5cmを測る。杯部の底部は丸味をもっており櫛による調整が行なわれている。脚部は杯部の接合部からなだらかに広がっている。裾先端は断面嘴状が退化して痕跡を残している。8は裾部径10.9cm、残存高 3.6cmを測る。杯部から急に広がり裾部において二つの段を有している。裾部先端は7と同様である。

觥

Ⅰ類(図版10-5~6、第13図4~6) 4は口径 9.9cm、高さ11.2cmを測る。ラッパ状に開く頸部は、口縁部で若干内傾しながらさらに開く。頸部と口縁部をわける部分に2条の沈線を有し、沈線の下に匏描き波状文が施文されている。球状部は、径 7.6cmを測り、径 1.2cmの円形穿孔がある。肩部に1条の幅の広い沈線を有し、沈線の上に櫛押圧文が施されている。5は口縁部と球状部を欠損しているが4と同様であり、残存高 5.8cmを測る。6は球状部だけ残存しており、高さ 5.9cmを測る。

Ⅱ類(図版10-7、第13図7) 球状部の下半分を欠損しており残存高18cm、口径13.8cmを測る。頸部はラッパ状に広がり、口縁部は段を有し立ちあがりをみせる。口縁部の段の部分には2条の沈線を有する。頸部の中央部にも3条の沈線を有し、沈線の上方には匏描き波状文が施されている。球状部は最大径16.2cmを測り、径 1.5cmの円形穿孔がある。肩部には3条の沈線を有している。

蓋

I類 (図版10-2・

3、第13図1~2)

口径 6.6cm~7.5cm、

高さ 2.5cm~2.7cm

を測る。1は天井部

に平坦面を有し、口

縁部において丸味を

持っているが、2は

笠状を呈している。

口縁端は身受部とな

り、反りは垂直近く

立ち上がり、先端は

幾分光っている。こ

の反りは1に比べて

短い。頂部には擬宝

珠形の撮みが付設さ

れている。

II類 (図版10-4、

第13図3) 口径10

.5cm、高さ 4.3cmを

測る。天井部は丸味

をもち、口縁端は薄

くなって身受部となる。

反りは垂直近く立ち

上がり、先端は尖っ

ている。肩部に櫛押

圧文が施されている。

頂部には頸の長い擬

宝珠形撮みが付設さ

れている。

査頸部 (第14図1~3)

1は口径4cm、残存高

2.2cmを測る。頸部

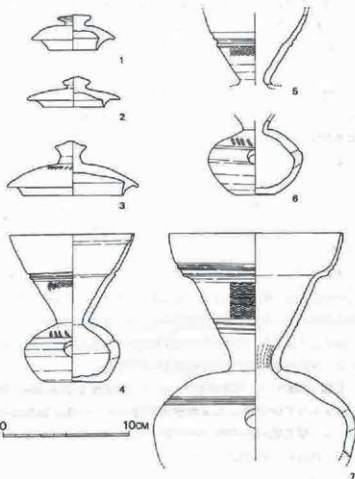
は外湾し、口縁端に

おいて内湾している。

口縁端の外側には凸

帯がついている。2

は口径7.3cm、残存



第13図 2号墳出土遺物④ (1/4)

くになって身受部となる。反りは垂直近く立ち上がり、先端は尖っている。肩部に櫛押圧文が施されている。頂部には頸の長い擬宝珠形撮みが付設されている。

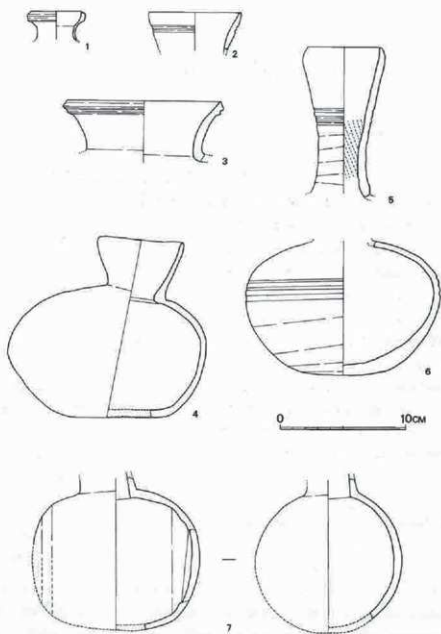
査頸部 (第14図1~3)

1は口径4cm、残存高2.2cmを測る。頸部は外湾し、口縁端において内湾している。口縁端の外側には凸帯がついている。2は口径7.3cm、残存高3cmを測り、2条の沈線を有する。3は口径12.7cm、残存高4.8cmを測る。口縁端は細く丸味を有し、外側に2条の凸帯を有する。

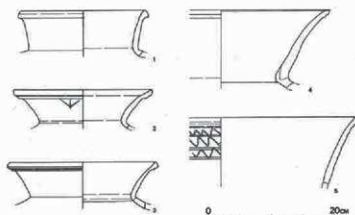
平瓶 (図版11-3、第14図4)

口径6.7cm、高さ14.1cm、体部径15.2cmを測る。口頸部は若干内湾しており、先端は丸く整えられている。胴は張り、底面は平坦になっている。

長頸壺 (図版11-1・2、第14図5~6)



第14圖 2号墳出土遺物⑤(片)



第15図 2号墳出土遺物⑥(1/4)

5は口径5.6cm、残存高11.7cmを測る。頸部は丸く外湾し、口縁端は垂直に立ち上がる。頸部には3条の沈線を有する。6は体部径15.5cm、残存高11.7cmを測る。胴は張り、底部も丸味を持っている。胴部に3条の沈線を有する。5と6は同様な焼成を呈している。

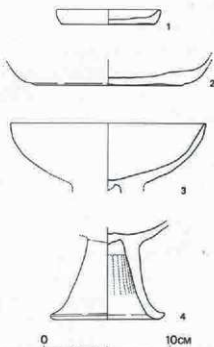
横瓶 (図版12-1、第14図7)

口唇部は欠損しているが、頸部は短く垂直に立ち上っている。胴は米俵形を呈しており、外面は棉による調整が行なわれている。残存高12.3cm、胴部最大径13.3×11.7cmを測る小形の横瓶である。

甕

I類 (第15図1~3) 口径19.6cm~23.1cmを測り、いずれも口頸部のみである。2・3は大きく外反しているが、1は垂直に近い立ち上がりみせる。3の口縁端は尖っているが、1・2は丸く整えられている。口縁端部の外面にはいずれも稜線を有する。1は段を有し、先端は若干尖っている。2は2つの段を有しているが、稜線はにぶくなっている。3の段は凸帯状になっている。

II類 (第15図4~5) 4は口径34.4cm、口頸部高11.3cmを測る。大きく外反した口縁部両端は、若干つまみあげられて稜線を有する。口縁端内側には平坦面を有し、外側には尖った凸帯を



第16図 2号墳出土遺物⑦(1/4)

有する。5は口径42.6cmを測り、4に比べて若干立ちあがっている。口縁部上端は垂直にみあげられ、先端は丸味を持っている。下端は丸く整えられており、その下に尖った凸帯している。頸部には3条の沈線が施され、3条の帯状部分には1本ずつの波状文が施文されている。

土 師 器 (図版11-4、第16図)

小 皿 (1)

口径8.1cm、高さ1.2cmを測る。口縁端は丸く整えられており、外底面には糸切り痕がみとめられる。器面は横なでされているが内底面はなでである。

杯 (2)

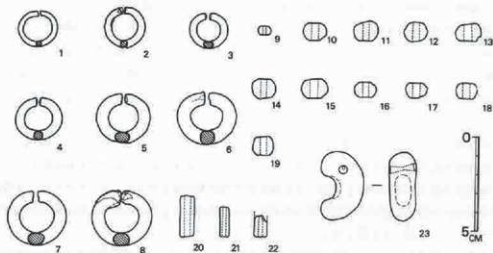
底面径11.8cm、残存高2cmを測る。器壁は底部が厚く、口縁部が薄くなっている。外底面には糸切り痕がみとめられ、内底面はなでによる調整がおこなわれている。

高 杯 (3・4)

3は高杯の杯部のみで、口径15.4cm、高さ5.1cmを測る。口縁部は内湾ぎみに外反し、口縁端は細くなっている。器面の内外にはすべて丹塗りをしているが、磨滅が著しく痕跡を残すだけである。4は脚部のみであり、裾部径9.1cm、残存高7.5cmを測る。器面の外側のみを丹塗ししており、内側はヘラ削りしてある。裾は折れ曲がるように広がっている。4も3同様に磨滅が著しい。

装 身 具 (図版11-5、第17図)

装身具は、8の全環が墓道から出土した以外はすべて玄室内から出土したものである。出土



第17図 2号墳出土装身具 (1/2)

状態は玄室内に散乱して出土した。

耳 環 (1~8)

7は銅芯銀張りで、表面は風化し黒色化している。1~6・8はいずれも銅芯金張りである。1・4は原形を保っている。2・8は部分的に破損し、銅芯も腐蝕している。3・5・6は表面が黒色化したり、緑青がふいている。

勾 玉 (23)

大形の勾玉で長さ 3.7cmを測る。孔は両側から穿たれている。白味を帯びた草色の硬玉製勾玉である。

管 玉 (20~22)

20は長さ 2.2cmを測る。ガラス製の管玉で緑色を呈する。21は長さ 1.6cmを測り、藍色を呈するガラス製の管玉である。22は欠損しているが20と同様の管玉と思われる。

丸 玉 (9~19)

いずれもガラス製であり、9は橙色を呈した小形の丸玉である。10~19は表面が白色を呈しており、風化が著しくもろい。

3. 3 号 墳

(1) 構 造

墳 丘 (図版2-2・5-1・6-1、第18・19図)

3号墳は、遺跡の中央部、標高35~40mにかけての斜面上に立地する。

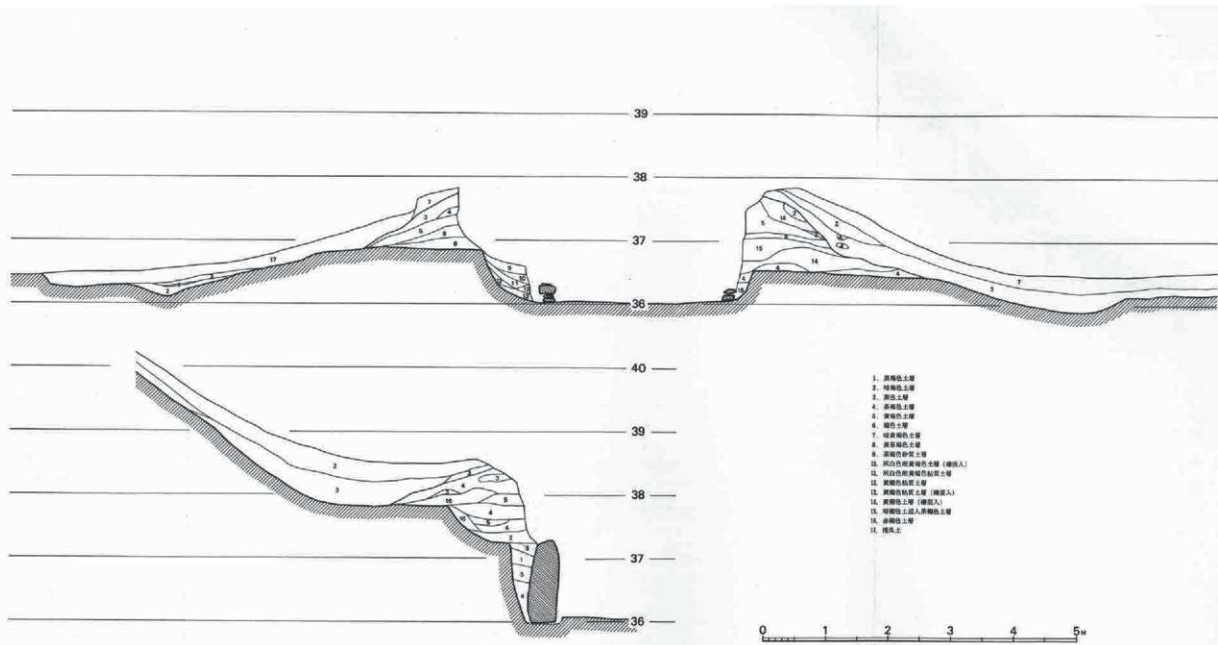
墳丘は防空壕、盗掘等で擾乱を受け石室上部は大きく陥没している。さらに調査前にブルドーザによって墳丘の東側、および南側を削平されている。このため詳細は明らかではないが、現在の墳丘状況から推定して、径約14m、推定高約 3.5mを測る円墳であることがわかる。

墳丘の築成にあたっては、円墳の形を明確にするため石室周辺部の地山をかなり整形している。

発掘前の地表の傾斜変換線に沿って斜面を削り出して整形し、石室を囲む状態で掘り込まれた馬蹄形の溝を検出した。溝は幅約 1~3m、深さ約 0.4mを測り断面はU字形を呈する。

溝を削り出した土は斜面を埋めて平坦面を作り石室構築の基礎工事に利用されており、これらの作業は並行して行なわれた。溝は降雨による墳丘の崩壊をさけるための排水溝の役割を果たすとともに、円墳の形を際立させている。

盛土は、墳丘築成の第1段階として、石室の基盤を作るために斜面を埋めることが行なわれたが、この部分の盛土は厚く羨道部末端の裾部から墳頂部までは約4.5mを測る。第2段階とし



第18図 3号墳墳丘土層図 (1/60)

て石室の架構と並行して墳丘中央部の盛土が行なわれた。この部分の厚さは石室床面から約4.0mを測る。第3段階として奥壁上にあたる最も斜面の急な部分の盛土が天井石の架構と並行して行なわれた。

遺物は、墳丘南東側の表土直下の黒褐色土層内から祭祀に利用されたと思われる須恵器が出土した。

石室 (図版5-1、第20・21図)

石室はすでに大部分が破壊をうけており、詳細は不明であるが、

東南の方向に開口し、主軸をN-57°-Wを示す複室の横穴式石室である。

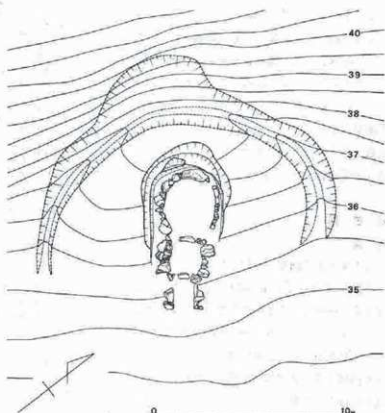
斜面を利用して築成しているため、玄室部は地山を掘り込んだ掘方内、前室および羨道部は斜面を埋めて平坦地を作り、その上に構築されている。

玄室は破壊が著しく、奥壁は1枚石をすえ、両壁には板石が持ち送られており3~4段の木口積が残存しているにすぎない。玄室は最大幅2.6m、長さ3.2mを測る楕円形の床面プランを呈する。玄室床面もかなり攪乱を受けていたが、若干の敷石を確認した。

前室もかなり破壊を受けているが、最大幅1.8m、長さ1.7mを測り、床面プランは扇張り呈している。床面の残存状況はよく、敷石もほぼ完全な状態を保っており、丸い川原石を利用している。

玄門と前門には框石があり、長さ約1.5m、幅約1.1mの羨道部には閉塞石がよく残っていた。

玄室からは、ガラス製丸玉、前室からは、須恵器の蓋杯・高杯などの遺物が出土した。



第19図 3号墳地山整形状態実測図 (1/50)

(2) 出土遺物

前述の如く、3号墳の石室は破壊されていたので、副葬品などの遺物も少ない。玄室はとくに破壊がひどく、出土遺物もガラス製丸玉のほかはない。前室には、床面において、須恵器・土師器・馬具・鉄器などが出土した。もともと大量に出土したのは須恵器で、そのほとんどが墳丘前面の表土下で出土した。以下説明を加える。

須恵器

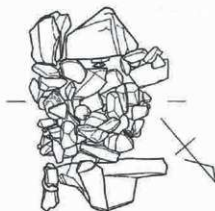
杯蓋

大別すると5種類に分類できる。

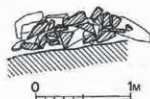
I類(図版12-2、第22図1-5) 反りを有するが、握みはつかないものである。1は他に比べて大きく、天井部から体部にかけて湾曲し、これを境として器壁は薄手となる。反りはやや内傾する。天井部は寛切り、内部はなで、ほかは横なで調整されている。色調は灰黒色を呈し、焼成は良いとはいえない。2は1に比べて、かなり天井部から体部にかけて直線的である。反りは厚く短い。天井部の一部は欠損しているが、残存部分はすべて横なで調整されている。色調は黄灰色を呈し、焼成はわるい。3は天井部がかなり厚く、肩部から口縁部にかけてうすくなり、わずかにくぼむ。反りはつまみ出された感じでつけられている。色調は、外面が灰白色、内面は青灰色を呈し、焼成はわるく、胎土に砂粒を含んでいる。4は、肩部から口縁部を残す破片である。反りは長くなり内傾する。胎土に砂粒を含み、色調は灰褐色を呈し、焼成は良好である。

II類(第22図6-8) 天井部は平坦ないし、いくぶんくぼんだ形態で体部との境が明瞭である。6・8は短い反りが内面につまみ出された感じでつけられ、7の反りは長く、口縁よりとびだす。調整は天井部が、寛削りされ、ほかは横なでされている。内面は天井部がなで、ほかは横なでされている。色調は、6が灰白色、7は灰黒色、8は灰黄褐色を呈し焼成はわるい。

III類(第22図9・10) 反りの付かない形態のものである。9は特徴が少なく、天井部から口縁部まで凹凸をもちながらも、全体になめらかなものである。調整は、天井部が寛切りされ、ほかは丁寧に横なでされている。内面天井部はなでである。色調は暗青灰色を呈し、焼成は良好である。10は9にくらべ口縁部がやや内傾する。色調は灰黒色を呈し、焼成は良くない。

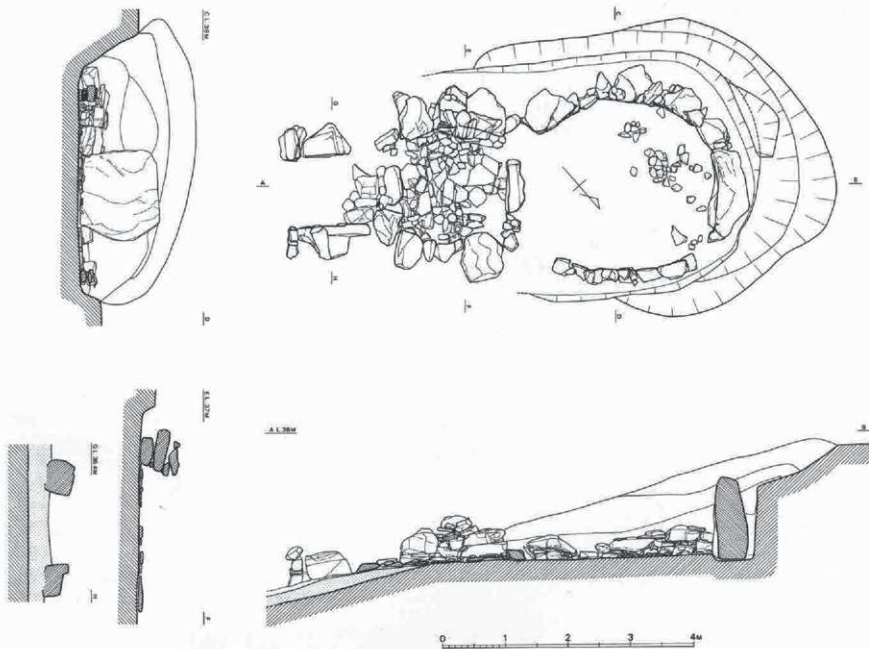


1/20.4m

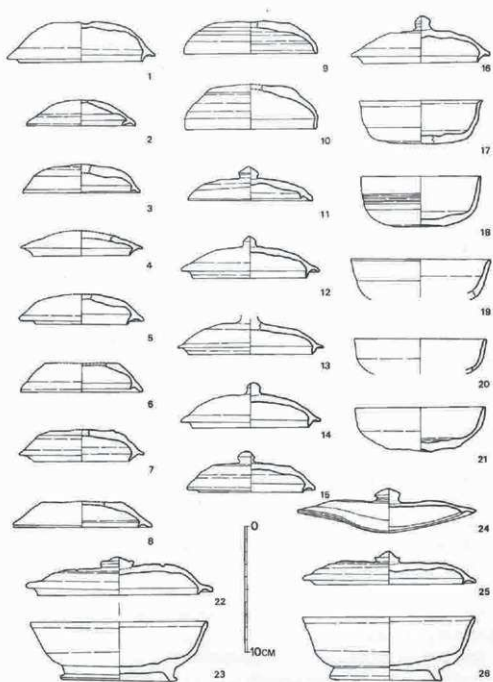


0 1m

第20図 3号墳閉塞部実測図(×)



第21圖 3号墳石室実測図 (1/60)



第 22 图 3 号墳出土遺物 ① (1/5)

Ⅳ類 (図版12-3~6、第22図11~16) 蓋に撮みをもち、反りを有するものである。15はⅡ類に撮みのつく形態で、ほかは天井部から肩部にかけての移行はなめらかで、体部と口縁の境はわずかにくぼむ形態を呈する。11の反りはつまみ出された感じでつけられ、器高は他にくらべて低い。色調は灰白色を呈し、焼成は硬く良好である。胎土には多少の砂粒を含む。12の反りはやや内傾し、口縁部よりとびだす。色調は青灰色を呈し、焼成はわるい。13は、天井部の一部を欠損し、撮みの形態は不明である。反りは、やや内傾し外面に段を有する。色調は青灰色で焼成はあるく、胎土に砂粒を含む。14は、断面が正三角形にちかい反りを持つ。色調は青灰色を呈し、焼成は良好である。16は全体的に薄手で、体部から口縁部にかけての内面はなめらかに湾曲する。反りは内傾し、口縁よりとび出す。色調は青灰色を呈し、焼成は良好で体部にヘラ記号が有る。天井部を篋削り整形したあと、撮みをつけ内面天井部をなでているほかはすべて横などで調整である。

Ⅴ類 (図版12-7~8・13-3、第22図22・24・25) 器形はⅣ類にくらべて大きく、平らな撮みを有する。器高は低く全体的に平たい感じを呈する。24はかなり変形していて、形態も明らかでない。短い断面三角形の反りをもつ。色調は青灰色を呈し、焼成は良好である。22は天井部がややくぼむ。口縁部よりややとび出す断面三角形の反りを有する。色調は一部に黒色が見られるが青灰色を呈し、焼成は良好である。胎土は砂粒を多く含み、体部にヘラ記号が有る。22と23はセットである。25は形態は22と同じであるが、やや小形で反りが短い。色調は外面が一部に黒色を呈すが、全体的に暗青灰色、内面は青灰色を呈する。焼成は良好である。調整はⅣ類と同じである。

杯 身

大別して4種類に分類できる。

Ⅰ類 (第22図17) 底部はわりあい平坦で、底部と体部の境は丸味を有する形態で、口縁端部は丸くつくられ、外反し内外両面に稜線が入る。底部は篋切りを行い未調整である。体部から口縁部にかけては横などでされ、内面底部はなで、ほかは横などで調整している。色調は紫青色を呈し、焼成は良好である。

Ⅱ類 (図版12-9、第22図18) 底部は平坦で、体部との境は丸味をもち、そのままやや外反ぎみに、丸くつくられた口縁端部につづく。体部には平行沈線が3条入る。底部外面にはヘラ記号が有る。底部は篋切りのままで未調整であり、底部内面はなで、ほかは横などで調整である。色調は灰色を呈し、焼成は良好である。

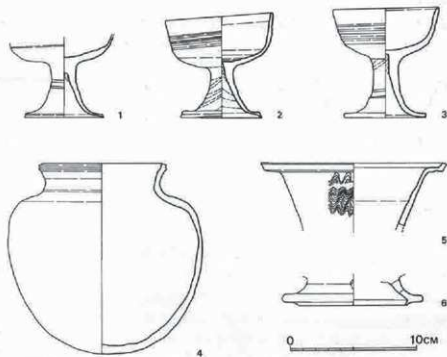
Ⅲ類 (図版13-1、第22図19~21) 19・20は底部を欠損し、形態は不明である。Ⅰ・Ⅱ類よりやや大形である。19は、外反する口縁部をもち、端部は丸くつくられている。20は19にくらべて薄手である。調整は横などでされている。色調は灰白色を呈し、焼成はわるい。21の底部は平坦であるが、篋切りのあと未調整で凹凸が見られる。体部は丸味をもち器壁は最も薄く、

やや外反し丸くおさめられた口縁部につづく。内面底部はなで、口縁部と体部は横なでされている。胎土には多少砂粒を含む。色調は青灰色を呈し、焼成は硬く良質である。

Ⅳ類(図版13-2・3、第22図23・26) 大形で高台を有する形態のものである。高台の高さは普通である。高台の形態は23と26では異なり、23は内湾して外側へ張り出し、端部は突き出している。26は外側へふんばる形態である。ともに脚下端面は水平である。杯部の形態はほぼ同じで、底部は寛削りで整形され横なで調整されている。底部内面はなで調整され、底部と体部の境は寛削りされている。ほかは横なでされている。口縁部は内湾気味にやや外反する。色調は灰白色を呈し、焼成は不十分である。

高 杯 (図版13-4・5、第23図1~3)

小形の無蓋高杯が3種出土した。1は、杯上部に欠損しその形態は明らかではない。脚裾は大きくひろがり、脚端部は下方にわずかにのびる。脚中央部には2条の沈線が入る。脚柱内部には、しぼり痕が観察される。調整は、杯部内面底部がなで、他は横なでされている。色調は暗青灰色で、焼成はわるい。胎土には砂粒を多く含む。2の杯部は、かなり薄手で底部から体部にかけて丸味をもち、口縁端部は丸く作られている。体部に3条の沈線が入る。脚端部は1のそれよりさらに下方にのびる。しぼり痕は脚柱両面に認められる。調整はすべてなで調整



第23図 3号墳出土遺物②(1/5)

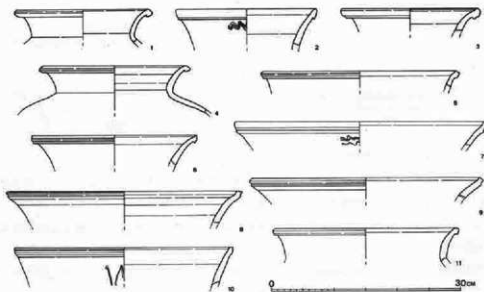
が行なわれている。色調は灰色を呈し、焼成はわるい。胎土には細砂粒を含み、いびつである。3の形態は、1・2にくらべて整っている。体部は丸く内湾し、口縁部はわずかに外反する。体部には3条の沈線が入る。脚柱には2条の沈線が施され、内外面ともにしぼり痕がみられる。色調は内面の一部は青灰色で、外面は黒色と灰白色の部分に分けられる。胎土、焼成ともに良好である。脚柱内面にヘラ記号が認められる。

壺（図版13-6・7、第23図4～6）

4は、ほぼ完形に復元できた。口縁部は外反し、口縁端部下方は小突起状に突る。口縁部と肩部との境には稜線が入り、最大径は肩部やや下方に位置する。体部から底部にかけては丸味を持ち、底部は丸底を呈する。接合部は中ほどよりわずかに下方で認められ、これを境に内外両面ともに、上方が横なで調整、下方はなで調整に分けられる。色調は青紫色を呈し、焼成は不十分である。胎土には砂粒を含む。底部にはヘラ記号が見られる。5は、壺の口縁部片である。口縁部は外反し、上部は外側に曲られ、端部は上方にはね上げられている。調整は横なでされ、その後、櫛による施文がなされる。色調は内面が灰白色、外面が紫青色を呈し、焼成はよくない。6は台付壺の高台と考える。外側へふんばる形態で、高台端部は内側下方へ突き出している。また高台の上部に、4方の円孔が穿たれている。色調は黄灰色を呈し、焼成はわるい。

甕（第24図）

完形のものはなく、かろうじて復元口径を測れる程度の破片である。口径からみて大きさは大形和小形の2種に分けられる。少なくとも11個体の甕が割割されたことがわかる。



第24図 3号墳出土遺物③(1/4)

鉄 器

不明鉄器 (図版14-1、第25図2)

全長14.5cmを測り、断面は四角形を呈し、両端は二股に分れるが欠損している。形態・用途は不明である。

馬 具

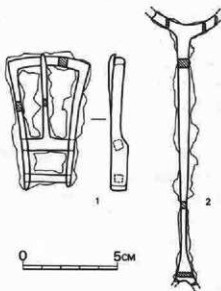
鞍 具 (図版14-1、第25図1)

長さ7.2cm、幅2.4～4.3cmを測り、中央部はやや湾曲する。断面は長方形または四角形を呈する。

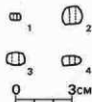
装 身 具

丸 玉 (図版14-1、第26図)

2種出土した。両方ともガラス製であるが1は藍色の径6mm、厚さ4mmを測る。2～4は径1cm～1.1cm、厚さ5mm～9mmを測り、表面の風化がひどく、非常にもろい。



第 25 図 3号墳出土鉄器 (1/2)



第 26 図 3号墳出土装身具 (1/2)

4. 4 号 墳

(1) 構 造

墳 丘 (図版7-1、第27図)

墳丘は、ブルドーザによってすでに削平され壊滅状態であった。さいわいなことに調査前に撮影された写真によって円墳であることを確認することができたが、詳細を知るまでにはいたらない。したがってこの古墳の調査は地山整形状態、石室構築の基礎工事の確認に主力をおいて実施した。

当古墳は、2号・3号墳と同様に、斜面上に立地しているため、墳丘を築造するにあたっては、石室を中心とする周辺はかなり斜面を削平し、地山整形が行なわれている。

まず尾根線に直行する様に石室の主軸がきめられ、掘方が設定され、さらにそれをとり囲む

様に馬蹄形の溝が掘り込まれた。

溝は斜面の地山を削り出して整形され幅4.5～1.7m、深さ約0.6mで断面はU字形を呈する。

墳丘に使用された土量は溝を削り出した土で確保したと思われる。地山整形状態から想定して当古墳は径約14.5mの円墳であることがわかる。

溝の南側末端部において多量の須恵器片が出土した。これは祭祀に利用され墳丘から流れ込んだものと考えられる。

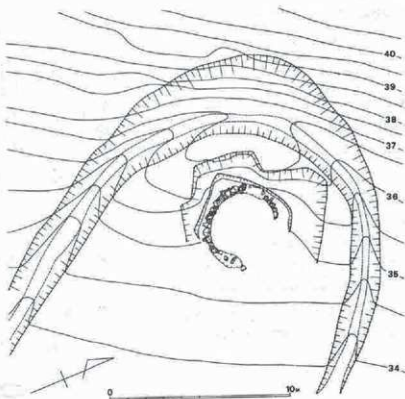
石室（図版7-2、第28図）

石室は、前述した如くブルドーザによって完全に破壊されており、石室架梁に利用された石材はあたり一面に散乱していた。このため詳細は不明である。

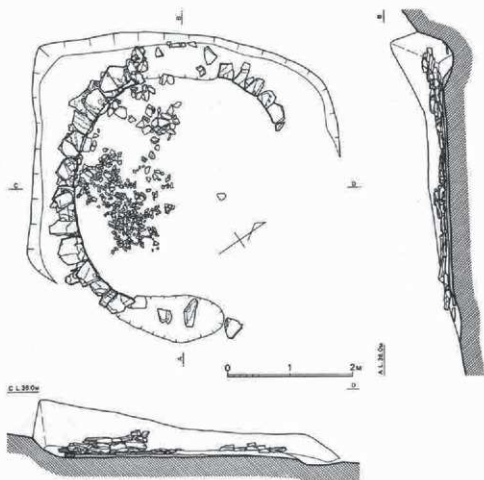
玄室は東側半分を失っているが、西側はわずかに2～3段の石組がやや内傾した状態で残っていた。残存状況から復元すると、玄室は、斜面を削り出した掘方内に構築され、最大幅約3m、長さ約3.5mを測り楕円形を呈する。また玄門の推定部分には框石の抜き跡を確認した。

床面は地山と同じ土壌で埋めて水平に整形されている。床石には礫を使用しており、玄室西側においてわずかに確認できたが、原位置にあったものは少なくともほとんど攪乱を受けている。

破壊された石材の位置、量からまた地山整形状態から判断して前室の存在は考えられないが前述した框石の抜き跡等から想定して羨道部は存在したであろう。



第27図 4号墳地山整形状態実測図(1/50)



第 28 図 4 号墳石室実測図(%)

以上のことから当古墳は主軸をN-57°-Wにとり、東南の方向に開口した単室の横穴式石室の主体部をもつ古墳と考えられる。

玄室からは、勾玉1、ガラス製丸玉数点、鉄鏃1、土師器が出土した。

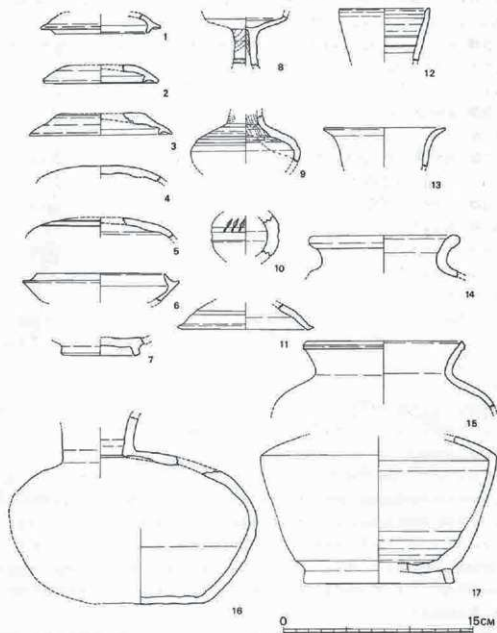
(2) 出土遺物

遺物は、須恵器・土師器・勾玉・ガラス製丸玉・鉄鏃等が出土した。このうち須恵器が最も多く、器種は、蓋杯・高杯・大甕・甕・長頸甕・平瓶・甗がある。土師器は杯片が出土したが復元、実測不可能であった。以下説明を加える。

須 恵 器

杯 蓋

I類(第29図1・2) 1は口径9.5cm、残存高1.5cmを測る。丸味を持つ体部から口端部は



第 29 圖 4 号墳出土遺物 ① (1/4)

外に広がり身受部となる。反りはやや内傾し、先端は丸く整えられている。2は口径9.3cm、残存高1.4cmを測る。天井部は平坦面を有し、体部は口端部へなだらかに広がる。口縁端は受部となり内面に反りを有する。反りの先端は尖っている。

Ⅱ類(第29回3) 口径11.4cm、残存高1.8cmを測る。天井部は平坦面を示し、肩部には稜線を有する。体部は口端部に直線的に広がり、口縁端の内面には反りを有し、先端はやや丸味を有する。

Ⅲ類(第29回4・5) いずれも天井部を残すのみで、丸味をもった天井部を有する。

杯身

Ⅰ類(第29回6) 口径12.4cm、残存高3.3cmを測る。底部は不明であるが、体部はすなりと広がり口縁端は蓋受部となる。反りは内傾しており先端は若干の面を有する。

Ⅱ類(第29回7) 底部のみで、高台付の杯である。高台の径6.3cm、残存高1.4cmを測る。

高杯(第29回8)

残存高4.1cmを測る。杯部は底面のみで、寛削りされている。脚部は円筒の部分を残しており、2つの段を有している。

觥(第29回9・10)

9は球状部の一部を残し、胴径8.7cm、残存高3.9cmを測る。肩部には2条の沈線がある。器面には櫛による調整痕がある。10は小形のもので、球状部の一部にすぎない。胴径5.4cmを測り、胴部の中央に幅の広い沈線を有する。また肩部には寛掘きの文様が施してある。

脚部(第29回11)

脚部のみで上部器形は不明である。脚部径10.8cmを測る。丸味を持ち内傾しながら広がりをみせる。裾端部は外側につまみ出されている。1条の沈線を有する。

口頸部(第29回12～15)

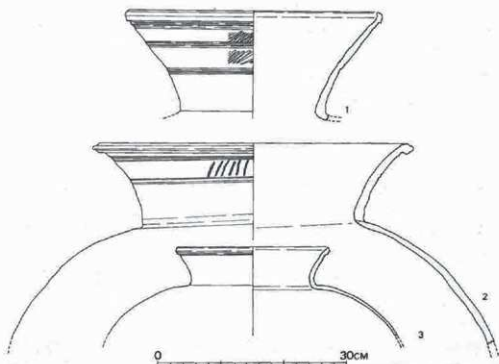
口頸部のみで、口径7.1cm、残存高4.2cmを測る。頸部はやや外開きに立ち上がり、口縁端を丸く仕上げられているが、内傾に段を有した痕跡がある。器面の外側は櫛による調整痕がみられ、内側は寛削りされている。13は外開きの頸部を有し、口縁端は折れるように広がっている。14は口径12cm、残存高3.4cmを測る。口縁部は外に開き、口縁端は丸く仕上げられている。口縁端の外側には段を有している。15は口径12.7cm、残存高4.7cmを測る。口縁部は外側に開き、口縁端の上は尖っており、下は丸く仕上げられている。口縁端下側には凸帯を有する。

平瓶(第29回16)

胴部最大径19.6cm、口縁部は欠損しており残存高は14.8cmを測る。平坦な底面を持ち、肩部は丸く胴張りの体部を有している。口頸部はやや外反している。

高台付長頸壺(第29回17)

体部を残すのみで残存高11.8cmを測る。体部の最大径は肩部にあり18.6cmを測り、稜線を有



第30図 4号墳出土物②(1/4)

する。底部は平坦面を有し、断面長方形の高台が付設されている。

甕

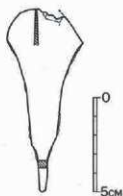
I類(第30図1・2) 1は口径39.2cm、残存高17.2cmを測る。ラッパ状に広がった口縁部は口縁端において立ち上がり、面を有する。口縁下端には凸帯を有している。口頸部には上から1条-2条-2条(3条)の沈線が施されている。また帯状部分には寛描きの文様が施されている。2は口径50.8cm、残存高31.6cmを測る。2は口径50.8cm、残存高31.6cmを測る。口縁端は丸く仕上げられ、口縁下端には段を有する。頸部には上から、3条-2条の沈線を有し、帯状部分には寛描きの施文がある。

II類(第30図3) 1・2に比べて短い口頸部を有し、口径24.6cm、残存高14cmを測る。外反する口縁部を有する。口縁端は上下端とも丸味を持ち、下端の下には凸帯を有する。肩部は丸く胴部に続く。

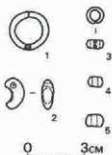
鉄器

鉄 鍔 (図版14-2、第31図)

玄室床面から出土した。三角形平根有基鍔である。先端を一部欠損しているが、復元すれば幅4.1cm、全長10.2cmを数え、茎は2.1cmである。



第 31 図 4号墳出土鉄器 (1/2)



第 32 図 4号墳出土装身具 (1/2)

装身具 (図版14-2、第32図)

耳環 (1)

玄室床面から出土した。細形の銅芯金張の耳環である。金箔はよく原形を保っている。

勾玉 (2)

玄室床面から出土した。小形で緑白色の硬玉製である。

丸玉 (3・4)

3種ある。玄室床面から出土したガラス製の丸玉である。全体的に白色で風化がひどく、もろい。

第3 おわりに

以上、各古墳について詳述してきたが、今回調査を行なった3基のほかに、付近に数基の古墳を確認した。その結果、古墳群は数基ないし十数基によって構成されていると考えられる。故にここで述べた事が古墳群の特徴とするのはいささか冒険と思われる。そこで「おわりに」として3基についての共通点と相違点について述べていく。

まず共通点として立地がある。石室の標高の差はあるけれども、1号墳が丘陵頂上部に立地するほか、2・3・4号墳とも丘陵の斜面に構築されている。斜面に墓壇を掘り、周りに溝をめぐらせている。地山に掘り込まれた墓壇の長さは、いずれも石室の全長と一致せず、玄室を据えるだけの面積にすぎない。よって墓壇の前面を埋めて地上げを行なっている。周溝はいずれも古墳を圍繞しておらず、馬蹄形の溝を呈している。溝は斜面の高位置を削り出して整形し古墳を斜面から際立たせるように墓壇と周溝を割付けている。また前述の墓壇の前面を埋立てて地上げしたのも、古墳を際立たせる要因であると考えられる。

石室の主軸はそれぞれ異なっているが、片山古墳群(注)の6・7・8号墳に比して、斜面に対しては平行である。それぞれが異なっているのは、古墳群の立地する丘陵の尾根線が屈曲し、斜面が少しずつ異なっているためである。あくまで斜面を意識し忠実に石室は構築されている。

次に相違点については、各古墳の石室の構造が違う事である。2号墳は単室、3号墳は複室、4号墳は詳細は不明であるが、単室と考えられる横穴式石室である。このように同一の古墳群のなかに構造の違った石室を築いていることは、中隈山古墳群を構成した集団における被葬者の相互の関係などによるものと考えられる。

石室の構造上の問題で、2号墳の石室がとりあげられる。2号墳の石室の羨道部から墓道へわかれる部分において、特異な石積の状態が発見された事である。第1の要因として、斜面に構築される石室の架構上の業と考えられるが、今回の調査ではそれを明らかにするまでに至らなかったで、今後の類似資料を待ちたい。

古墳群の築造年代は、出土した遺物から2号墳が最も古く6世紀中葉から後半にかけてと考えられ、数次の追葬が行なわれている。3号墳と4号墳の築造については、新旧ははっきりさせることができないが、7世紀後半頃と思われ、数次の追葬が行なわれている。

注 三島 格、柳田純孝、柳沢一男、福田一征『片山古墳群』

(福岡市埋蔵文化財調査報告書第24輯) 1973

圖

版



1. 中隈山古墳群遠景



2. 中隈山古墳群近景（南から）



1. 2号墳丘（東南から）



2. 3号墳丘（南から）



1. 2号墳全景



2. 2号墳石室



1. 2号墳丘断面



2. 2号墳遺物出土状態



1. 3号墳全景



2. 3号墳石室



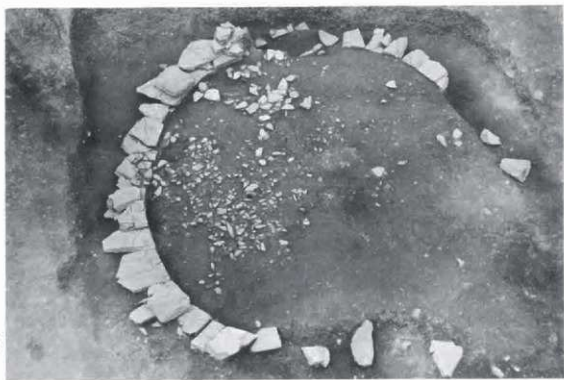
1. 3号墳墳丘断面



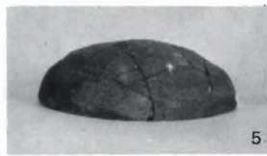
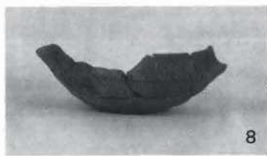
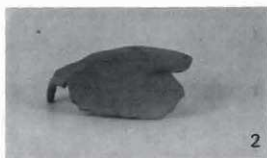
2. 3号墳遺物出土狀態（前室）



1. 4号墳全景



2. 4号墳石室





1



2



3



4



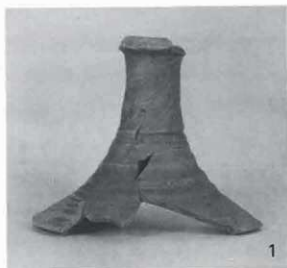
5



6



7



1



5



2



6



3



4



7



1



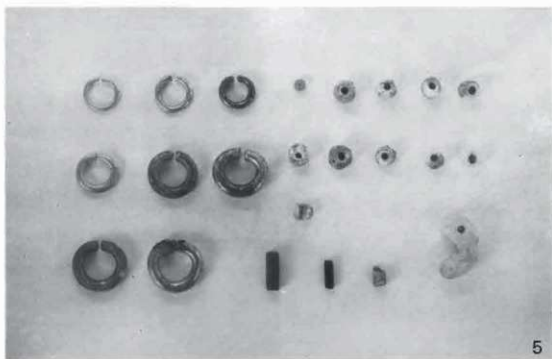
3



2



4



5

2号墳出土遺物④



1. 2号墳出土遺物⑤



5



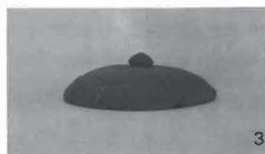
6



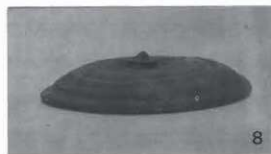
2



7



3



8

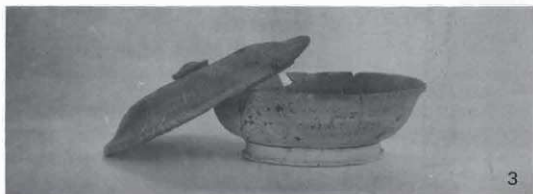


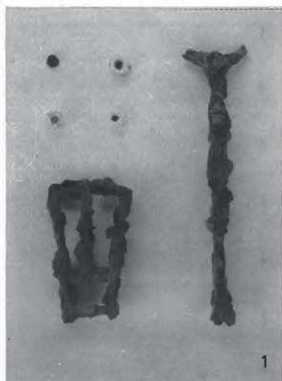
4



9

2. 3号墳出土遺物①





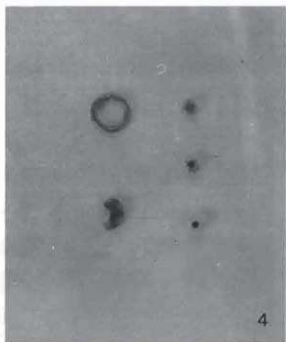
1. 3号墳出土遺物③



2



3



4

2. 4号墳出土遺物

久留米市文化財調査報告書 第8集

昭和49年3月31日

発行 久留米市教育委員会
久留米市城南町15-3

印刷 (有)猪飼プリント
久留米市東和町6の18